

『人間の由来』を深く考える

「生きる力」シリーズで扱われてきた視点と、少し異なるかも知れないが、今回は地球上に生息する多くの「いきもの」のひとつとして人間を捉えて、その生き方を考えてみたいと思う。毎日、わたしたちは「食事」をして日々の生活を送っている。食事をするのは、他の「いきもの」を自分の体内に取り込んで自分自身を作り替えるという生物としての営みでもあるが、わたしたちは人間が地球上に生息している多様な「いきもの」の一員であることをあまり意識してるとは言えないようである。

人間とは何だろうかと考えるときに、自分の周りのことを中心に考えるか、自分が置かれている周りの社会のことを考えるか、あるいはもう少し広く例えば地球に生息している生物全体を見回しながら考えるかで、見えてくる景色が違うのではないだろうか。現在の人間社会は急速な人口の増加と大量のエネルギーを消費する社会状況を創り出し、地球の温暖化の進行と言う深刻な事態を招いている。その上、地域や国家間での様々な争いが絶え間なく続いている状況にある。

まだ、表題「人間の由来」(注1)に触れていなかったが、今から150年以上前に、「いきもの」としての人間について深く考えた人がいた。その当時の研究者の多くは、地球上には多種多様な生物が存在しているが、それぞれの種は不変の生成物で、それぞれ別個に創造されたものであると考えていた。しかし、少数の研究者は生物の種は変容を受けると考えた。この少数の研究は先行する生物形態の世代の子孫と考えていた。この少数の研究のなかで、人間を含めた生物の種がどのようにして変わってきたのかを深く考えた人に、「種の起原」(注2)の著者であるチャールズ・ダーウィンがいる。「種の起原」では動物や植物の飼育あるいは栽培下で起こる変異や、自然の下で起こる動植物の変異について検討し、自然淘汰により生物は徐々に異なるものに変化してきたことを示した。彼は晩年に生物としての人間について

て深く考え「人間の由来と性に関連した淘汰」(The Descent of Man, and Selection in Relation to Sex) (注3)をまとめた。この書は「人間の由来」(注1)のタイトルで翻訳されている。

ダーウィンは「人間の起源または由来」については、決してわかることはないだろうと、しばしば自信を持って主張されてきたと述べた上で、知識よりも無知の方が、より多くの自信を生み出すものだと述べている。そのうえで、「あれやこれやの問題が、科学によって決して解けることはないだろうと強く主張するのは、より多くを知っている人々ではなく、より少なくしか知らない人々である。『人間の由来』上17ページ」と現在の社会でも通じる見解を述べている。

ダーウィンはイヌと人間の同時期の胚発生の図を示して類似点が多いことを示すなど、多くの具体的な事例で、人間と動物の様々な器官の比較を行い、「胚発生の過程や数多くの形態構造が、重要なものも瑣末なものも含めて非常に類似していること(同右下471ページ)」を詳しく説明している。これらの多くの事例を積み上げた上で「人間が、他の古くて、下等で、今は絶滅してしまった何らかの形態のものから由来した(同右18ページ)」のだと結論している。ただし、この結論そのものはダーウィンが初めて示したのではなく、すでに他の研究者からも提示されていたことであった。

ダーウィンは多くの事例や人間と動物の器官の丁寧な比較などを通じて「現在のわれわれの生物界全体に関する知識をもつてすれば、それらの持つ意味はもはや間違えようがない。(同右471ページ)」としているが、同時にその当時のヨーロッパ社会が到達した状況では、「人間の由来」で明らかになった結論について、次のように述べざるを得なかった。「人間は何らかの下等な形態から進化したということは、残念ながら多くの人々にとっては非常におぞましいことであろう。(同右491ページ)」

ダーウィンが生きた19世紀という時代には遺伝学の基礎や法則についてはまだ知られていなかったし、遺伝子やDNAはもちろんのこと、染色体の存在も知られていなかった。そのため、ダーウィンが「人間の由来」で他の動物から人類への進化のプロセスや遺伝について考察しているところには現在から見ると誤った記述や曖昧な記述が含まれているが、それは当時の研究で解

明されていた知識の限界と言えよう。また、現在から見ると、人種についての議論などで「未開人や野蛮人」など差別的な表現が多いが、これは19世紀の西欧における非ヨーロッパ人への差別的な文明観の反映であり、ダーウィン自身が差別的な考えが強かったわけではないと言われている。

ダーウィンが150年前に「人間の由来」で到達した結論である人間は「下等な形態から進化した」という考えが、現代社会が直面する課題を乗り越えていこうとしたときにどれだけ皆のものになっていくかが、試されているのではないだろうか。


現在、ダーウィンの著作等はいくつかデジタル化され、ダーウィンオンラインのほかに多くのサイトで公開され、利用が可能となっている。

DARWIN ONLINE

Charles Darwin, 1809-1882

Biography

Perhaps no one has influenced our knowledge of life on Earth as much as the English naturalist Charles Darwin (1809-1882). His theory of evolution by natural selection, now the unifying theory of the life sciences, explained where all the astonishingly diverse kinds of living things came from and how they became acclimated to their particular environments. His theory reconciled a host of diverse kinds of evidence such as the progressive fossil record, geographical distribution of species, recapitulative appearances in embryology, homologous structures, vestigial organs and nesting taxonomic relationships. No other explanation before or since has made sense of these facts.





ながつか たかし 長塚 隆

鶴見大学 名誉教授

微生物学の研究から情報学へ、データベース協会会長などを経て、2004年から新設された鶴見大学文学部ドキュメンテーション学科教授。2015年より2018年3月まで同学科図書館員リカレント教育推進寄附講座教授。1948年生。現在、情報知識学会副会長、NPO法人日本農学図書館協議会会長、国際図書館連盟(IFLA)地域資料と系図学常設委員会事務局長。【著書】『挑戦する公共図書館—デジタル化が加速する世界の図書館とこれからの日本—』(日外アソシエーツ 2018)、『デジタル環境と図書館の未来—これからの図書館に求められるもの—』(共著、日外アソシエーツ 2016)。

注1) チャールズ・ダーウィン『人間の由来(上・下)』、長谷川真理子・訳 (2016) 講談社(学術文庫)
 注2) チャールズ・ダーウィン『種の起原(上・下)』、八杉 竜一・訳 (1990) 岩波書店(岩波文庫)
 注3) Darwin, C. R. 1871. The descent of man, and selection in relation to sex. London: John Murray. Volume 1. 1st edition.
<http://darwin-online.org.uk/content/frameset?pageseq=1&itemID=F937.1&viewtype=text>